

祖父の灯

39期 得田 従子

さあ、一息入れる時は、まず、抹茶を頂く。いつも手にするのは「稚拙な餅つき兎・道源」と名の入った灰釉茶碗。明治二十一年生れ、祖父・源蔵自作の米寿祝いの品である。触れる度、走馬燈のように懐かしさが駆け巡る。実に魅力のある人だった。



初孫の私は片時も離れず側にいた。仏間での読経、妙心寺への参禅、難解な『碧巖録』（へきがんろく）の提唱、何も解らず辛抱強く座っていたものだ。帰宅がてら「内緒」と笑いながら、たまに今程有名でなかった料亭『菊乃井』や『たん熊』に連れて行ってくれた。

一番鮮明な記憶はシベリア抑留者の出迎えである。二条駅、京都駅に何度か旗を持って出かけ、目が合えば深いお辞儀をするように注意された。時折、その方達が訪ねてこられたが、抑留体験は誰も問わず語られず、緊張感漂う佇まいに子供心にもその過酷さを感じ取ったものだ。

友人は、私の特性を鈍な協調性と言う。その人の言葉・態度の背景を感じ取り、和するまで一呼吸ずれる。祖父との密な交流の中で育まれたものだ。それは、時には力となり、刃となり私の人生を操ってきた。が、今こうして家族にもカレッジ仲間にも恵まれ目前に傘寿を迎えようとしている。やはり、究極の「爺々馬鹿」のお陰である。

今日も掌で包み一服。唯々感謝である。